経済学叢書◆

経済学史

◆経済学叢書

経済学史

羽鳥卓也
吉田静一 編

世界書院

著者紹介（執筆順）

船越経三　神奈川大学教授

羽鳥卓也　岡山大学教授

吉田静一　東京経済大学教授

山田鋭夫　滋賀大学助教授

松岡利道　龍谷大学助教授

玉井龍象　神奈川大学教授

経済学史　〈経済学叢書〉

昭和54年6月10日発行

Seikai Shoin

編者　羽鳥卓也　吉田静一

発行者　伊藤武

印刷所　誠進社

発行所　株式会社 世界書院　東京都千代田区神田神保町1の62　振替東京 42777 電話 (294)5221(代表)

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

はしがき

経済学史を、なぜ、何のために学ぶかは、経済学史を学ぶ者が最初にぶつかり、そして最後までつきまとわれる問題である。それにたいする答えは、もちろん一義的であるはずはなく、それぞれが自分で見出さなければならないが、ただ一言、経済学史とは経済学を広い歴史的視野のなかでとらえる学問であることだけは、言っておかなければならない。経済学を歴史的視野のなかにおくことによって、たえず経済学の自己検討を迫るのが経済学史という学問だ、ということになるであろうか。

経済学史を学ぶ目的に応じて、経済学史の型(タイプ)もまた異なってくる。経済学史には、さまざまな型がある。理論型と歴史型を両端において、その中間に、それぞれの変種をもふくめ、多様な型が並ぶが、経済学史がこのように多種多様な型に分れるのは、その研究対象が理論と歴史の二つの領域にまたがらざるをえないこの学問の、いわば宿命とも言うべきものである。といって、この宿命の前に手をこまねいていたのでは、経済学史はいたずらに理論と歴史の両端に引き寄せられるばかりであろう。しかし、経済学の歴史を理論で裁断したのでは、その歴

史性が見失われる。他方、歴史に埋没したのでは、経済学が理論として練り上げられていく過程が見えなくなる。そこで、経済学史を研究し叙述するときの問題は、この理論と歴史とをいかに統一するかにかかっている、と言わなければならないであろう。そしてその場合、われわれは、その鍵を、現実—政策（論）—理論—政策（論）—現実の往還のなかに、求めることにしてみたい。それはこういうわけだからである。

理論の生い立つ歴史的現実をぬきにして、経済学史を語ることはできない。ここで歴史的現実というのは、この場合もちろん経済的諸利害が対立し衝突する場のことであり、この対立と衝突をふくみつつ国民経済が構成される場のことである。政策は、さし当っては個々の経済的利害につき動かされながら、しかし、究極的には国民経済の発展にとってもっとも有効なものとして提示される。そのさいそれは、国民経済についての一定の構想、さらには経済秩序についての一定の観念によって支えられていなければならないであろう。政策の背後には政策論がなければならない。そして政策を直接つき動かすものが個々の経済的利害であるかぎり、政策論もまたつねに複数であり、経済的諸利害の対立と衝突は、より抽象的なかたちでは政策論争を生みおとすことになる。経済理論は、こうした政策論争のなかから——あるいはそれを背景にして——形成される。政策論は、国民経済の理論的解明を要請し、国民経済の資本主義としての展開は、資本主義的生産様式の理論的解明を求めるからである。

さて、経済理論が形成されてくるこの過程に視界を限って経済学史を研究し叙述するとなると、それは歴史型の経済学史となる。この型の経済学史では、経済的諸利害の対立と衝突、政策をめぐる論争、諸理論間の批判と反批判が重視される。したがって、経済史、政治史、思想史の研究成果が援用されることが多い。

他方、以上のようにして形成された理論が、あるいは批判され、あるいは継承されて、より洗練された理論へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と発展していく過程にのみ注目して経済学史が書かれるとすれば、そこに出来上るのは理論型の経済学史であろう。もちろんこうした型の経済学史が成立し存在しうることを、その意義とともに、否定することはできない。しかし、理論は政策（論）のなかから生い立ち、それを支えるものとして構想され組立てられたのであった。したがって、理論は、他の先行する理論にたいして批判と対立の関係に立つばかりでなく、他の先行する政策（論）にたいしても批判と対立の関係に立つ。経済学における論争は、多くこのなかで生じるのであり、そしてこの論争のなかで理論の批判的継承ということもまたおこなわれる。このことを忘れるならば、理論型の経済学史は、いたずらに「歴史離れ」をおこすだけとなる。

そこで、理論型にも歴史型にもおちいらない経済学史を書くためには、現実—政策（論）—理論—政策（論）—現実のたえざる往還のなかに、いわゆる理論史を組み込む以外にはないであろう。これを、われわれは、いまかりに「経済学批判」の歴史と呼んでおきたいと思う。もちろん「経済学批判」とはマルクスが使った言葉であり、今日ではマルクスが使った意味でのみ理解されている。マルクスは、（古典派）経済学のなかにブルジョア社会が理論的に凝縮されて映し出されていると見、（古典派）経済学を批判することによってブルジョア社会そのものを根底から批判することに成功したのであった。そのさいマルクスが、（古典派）経済学の成果を十二分に、しかも批判的に吸収しつくしたことは、あらためて言うまでもない。

この「経済学批判」という言葉をマルクスが使ったよりもゆるやかな意味で利用し、先行する社会・経済・政治体制の批判が同時に先行する経済学の批判をともない、それをともなわずには体制の批判も成り立たぬという意味に広げるならば、それは、アダム・スミス以来、経済学史のうえにいくらでもその例を見出すことのできる

ものである。というより、「経済学批判」をおこなうことなしに経済学史のうえに名を残した経済学者はいないはずである。ここではただ一例、アダム・スミスの重商主義体制批判がトーマス・マンの（というよりマンをかりて実はジェイムズ・ステュアートの）批判をともなわざるをえず、この批判をとおして重商主義体制に固執することの愚かさが明らかにされたことをあげておけば、そのことは理解できるであろう。

本書は、このような、経済学史を「経済学批判」の歴史として書く意図のもとに、編まれた。もちろんここで経済学といっているのは、資本主義の運動法則を（断片的にではなく）体系的に解明する経済学のことであり、それが批判と継承のなかで練り上げられていく過程が、ここで問題とされるのである。そこで、このような意図にもとづいて、本書では、第一章が、重商主義からではなく、アダム・スミスから始まり、スミスに先行する重商主義と重農主義は、批判の対象としてスミスの章で論じられることになったばかりではない。以下の各章でも、出来上った理論の組立てと内容について説くことよりも、その理論が出来上ってくる過程をえがくことに比重がおかれることになった。もちろん、本書は分担執筆によったため、各章の叙述にはおのずから執筆者の個性がにじみ出る結果になったし、また、各章の対象となった経済学者についてのわが国での研究水準にかかわることでもあるが、章によって、叙述の比重が、理論の形成過程と理論の内容とのいずれかに傾くことにもなった。これはいたし方のないこととしてご了承いただきたい。

本書は、このようなわけで、通史の体裁をとってはいるものの、主だった経済学者を万遍なくあつかう通史を意図したものではない。本書の構成そのものがすでにある偏りを示しているし、内容もまた、最近の学史研究の成果を十分に吸収した、通史としてはやや高度のものである。本書に欠けた部分については、この後にかかげる

いくつかの通史で補っていただきたいと思うが、本書を通じて、読者は、学史研究の水準の一端を通史のかたちで知っていただけるはずである。

一九七八年十二月

編　者

＊ 参考文献 通史

『経済学説全集』（未完、既刊分一〇巻）河出書房、一九五四－六年。
内田義彦・小林昇・宮崎義一・宮崎犀一編『経済学史講座』全三巻、有斐閣、一九六四－五年。
遊部久蔵・小林昇・杉原四郎・古沢友吉編『講座経済学史』全五巻、同文館、一九七六－　年。
内田義彦『経済学史講義』未来社、一九六一年。
内田義彦・住谷一彦・平田清明・大野英二・伊東光晴『経済学説史』筑摩書房、一九七〇年。
杉原四郎・真実一男編『経済学形成史』ミネルヴァ書房、一九七一年。
時永淑『経済学史』法大出版局、一九七一年。
出口勇蔵編『経済学史』ミネルヴァ書房、一九七二年。
マルクス、岡崎次郎・時永淑訳『剰余価値学説史』全三巻、『マルクス・エンゲルス全集』第二六巻、大月書店、一九六九－七〇年、国民文庫、全九巻、一九七〇－一年。
ロール、隅谷三喜男訳『経済学説史』全二巻、有斐閣、一九五一－二年。
ハチスン、長守善・山田雄三・武藤光朗訳『近代経済学説史』全二巻、東洋経済新報社、一九五七年。
シュムペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史』全七巻、岩波書店、一九五五－六一年。
ジャム、久保田明光・山川義雄訳『経済思想史』全二巻、岩波書店、一九五五－七年。
ブローグ、久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』全三巻、東洋経済新報社、一九六六－八年。

目次

はしがき

第一章　古典派経済学の成立
——アダム・スミス——

序　説　スミスの時代とその学問的課題……五

第一節　スミス経済学の先行学説……一〇
——その背景と基盤——

Ⅰ　重商主義の政策と学説……一一

Ⅱ　重農主義の学説……一八

第二節　スミスの学問体系……二三

第三節　市民社会の倫理的構造……二七

Ⅰ　同感と観察者の原理……二七

Ⅱ　道徳の一般原則とその内面化＝主体化……三〇

Ⅲ　市民社会の精神的構造……三三

第四節　法学と初期経済思想……三五
Ⅰ　スミス法学の課題……三五
Ⅱ　初期の経済思想……三六
第五節　歴史批判と現状分析……四一
——「自然的自由の体系」への道——
Ⅰ　歴史批判＝国富増進の阻害要因の究明……四一
——重商主義成立の基礎解明——
Ⅱ　重商主義批判……四六
Ⅲ　J・ステュアートの経済理論……四九
Ⅳ　自然的自由の体系……五三
第六節　スミス経済学の成立……五四
Ⅰ　スミス経済学の基調とその構成……五四
Ⅱ　交換価値の究明……五六
Ⅲ　価格とその構成要素……六〇
Ⅳ　再生産と資本蓄積……六一
むすび……六六
第二章　古典派経済学の展開
——リカードウ——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一節　リカードウとその時代 …… 七一
Ⅰ　リカードウの生立ち …… 七一
Ⅱ　ナポレオン戦争終了期のイギリス …… 七三
第二節　穀物法改正をめぐるマルサス・リカードウ論争 …… 七七
Ⅰ　マルサスの輸入制限擁護論 …… 七七
Ⅱ　リカードウの農業保護論批判 …… 八三
第三節　蓄積と分配の理論の完成 …… 九〇
Ⅰ　経済学の課題と基礎理論 …… 九〇
Ⅱ　賃金および利潤の本質規定 …… 九二
Ⅲ　価値論の修正について …… 九五
Ⅳ　地代の本質規定 …… 九八

第三章　古典派経済学の補完
——セーとシスモンディ——

第一節　セー『経済学概論』の構成 …… 一〇三
Ⅰ　セーのスミス批判 …… 一〇三
Ⅱ　『概論』の構成 (1) 生産論 …… 一〇七
Ⅲ　『概論』の構成 (2) 分配・消費論 …… 一一三

第二節　シスモンディ経済学の生成……一八
Ⅰ　シスモンディとスミス……一八
Ⅱ　『商業の富』の再生産論……三一
第三節　恐慌と販路説……一七
Ⅰ　セーと恐慌……一七
Ⅱ　販路説……一〇
第四節　シスモンディ『経済学新原理』の構成……一五
Ⅰ　シスモンディと恐慌……一五
Ⅱ　『新原理』の構成(1)所得論……一八
Ⅲ　『新原理』の構成(2)恐慌論……一四
第五節　シスモンディとセー……一五

第四章　古典派経済学の変質
——J・S・ミル——

第一節　J・S・ミルとその時代……一九
Ⅰ　ミルの生立ち……一九
Ⅱ　産業革命完了期のイギリス社会……一〇
Ⅲ　選挙法改正期のミル……一四

Ⅳ　長期不況とチャーティズムの昂揚……一六六
Ⅴ　ミルの「社会主義者」への変身……一六九
第二節　ミル経済学の特質……一七五
Ⅰ　ミルの経済学批判の方法……一七五
Ⅱ　ミル経済学の二大領域……一七八
——理論と応用——
Ⅲ　生産論と分配論との峻別……一八〇
Ⅳ　ミルの利潤論……一八三
Ⅴ　ミルの価値論……一八五
第五章　マルクス経済学の成立
第一節　マルクス経済学への視点……一九三
第二節　私的所有の批判と交換法則……一九八
——初期マルクス——
Ⅰ　一八四〇年代のマルクス……一九八
Ⅱ　私的所有と疎外された労働……二〇〇
Ⅲ　リカードウ価値論への開眼……二〇三
Ⅳ　資本と労働との交換……二〇五

第三節　経済学批判の体系……二二三
——中期マルクス(一)——
Ⅰ　一八五〇年代のマルクス……二二三
Ⅱ　経済学批判体系のプラン……二二四
Ⅲ　資本一般の体系……二二六
Ⅳ　資本一般の性格……二二九
第四節　剰余価値と生産力……二三三
——中期マルクス(二)——
Ⅰ　剰余価値とその動態……二三三
Ⅱ　生産力増大と剰余価値……二三五
Ⅲ　必要労働の措定と否定……二三〇
第五節　資本の経済学批判……二三五
——後期マルクス——
Ⅰ　一八六〇年代以降のマルクス……二三五
Ⅱ　『資本論』の構成と性格……二三七
Ⅲ　資本機能と資本所有……二四〇
第六章　マルクス経済学の展開
はじめに……二四七

第一節　ルクセンブルクの帝国主義論……二四八
Ⅰ　「修正主義批判」――『社会改良か革命か』――……二四八
Ⅱ　ベルンシュタインの反批判と『社会改良か革命か』第二版……二五三
Ⅲ　『経済学入門』から『資本蓄積論』へ……二五八
Ⅳ　『資本蓄積論』の論理構成……二六一
Ⅴ　『資本蓄積論』の帝国主義認識……二六四
第二節　ヒルファディングの帝国主義論……二七〇
Ⅰ　修正主義論争と通商政策論争……二七二
Ⅱ　『保護関税の機能変化』の内容……二八〇
Ⅲ　帝国主義認識の展開(1)一九〇七年まで……二八四
Ⅳ　帝国主義認識の展開(2)一九〇七年およびそれ以後……二八六
Ⅴ　帝国主義認識の展開(3)一九〇七年恐慌について……二九四
第三節　『金融資本論』の論理構成……二九五

第七章　近代経済学の成立と展開

第一節　近代経済学の特質……三一一
Ⅰ　近代経済学とは何か……三一一
Ⅱ　近代経済学の方法的特質……三一七

第二節　近代経済学成立の事情と背景……三三六
Ⅰ　経済学史における限界革命……三三六
Ⅱ　限界革命の起源に関する諸要因……三三三
第三節　近代経済学の展開と課題……三四〇
Ⅰ　ジェヴォンズと近代経済学の基礎……三四〇
Ⅱ　メンガーとオーストリア学派の成立……三四七
Ⅲ　レオン・ワルラスと一般均衡理論の形成……三五一
Ⅳ　マーシャルとケムブリッジ学派の課題……三五七
Ⅴ　〝静穏の経済学〟の終焉……三六五
人名・文献索引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com